

木村定三の文体

石崎 尚

木村定三は自分の愛好する作家について、しばしば求めに応じて書き残していた。彼の文章は「木村定三著作集」にまとめ、解題として「美術研究家としての木村定三」として論じたことがある¹。その後、新たに二つの文章が見つかったため、「著作集」に付け加える形で「木村定三著作集補遺」として今回の紀要でまとめた。ここでは若干の補足として、木村定三の文章の大きな特徴である「再掲と加筆」について考えてみたい。

先の「木村定三著作集」では19編を掲載し、そして今回の「補遺」では2編を掲載したので、計21編の文章がまとまったことになる。しかしながら、実は木村が生前に発表した文章は21編よりも多い。それが分かっているながら何故、全てを掲載しなかったのか。その理由は、木村の文章に再掲が多く含まれるからである。ある作家について文章を書く場合に、既に発表した文章を多い時には9割以上もそのまま使っているのである。実は「著作集」としてまとめる際に、この再掲をどのように扱うべきか悩んだのだが、ほとんど同じ文章が何度も登場することで煩雑になり、混乱を招く恐れがあると判断し、「内容の重複が認められる場合、より情報量の多い方を採用」するものとした。より情報量の多い方は、大抵の場合発行日が後の文献のことである。

この再掲は、ともすると使い回しのような印象を与えてしまうかもしれないが、木村自身にとっては意図的なものだったようである。それは以下のような言葉からも明らかである。「熊谷守一の人と芸術について何か書くようにとのことですが、実は私は前に拙著『熊谷守一作品撰集』で自分の思っていることは殆ど書き尽してしまいました。もう一度書けと言われても、丁度真理は一つで二つないごとく同じようなことしか書けないし、以下は日本経済新聞社制作のあの本に書いたことがたくさんとび出すわけで、いわばあの本は極め付きとでもいえましようか²。つまり、彼の場合、最初に書いた文章で言いたいことは言い尽くしてしまうため、その後、同様の依頼があったとしても「真理が二つない」以上、同じことを繰り返し書くしかない、というのである。

ただし、重要なのは同じ文章を再掲する場合、その都度細かく表現などを言い換えており、読者に対する配慮が見られることである。ここには文章を書く際の木村の誠実な姿勢が見て取れる。これは木村が「若しも私の右の論評に間違いがあれば、神罰仏罰を受けることを覚悟して、以上の如く執筆したことを最後に述べさせていただきます」と述べてい

1 『愛知県美術館研究紀要第26号 木村定三コレクション編』愛知県美術館、2020年。

2 木村定三「熊谷守一の人と芸術」『新美術新聞』1972年11月1日号、美術年鑑社、3面。

ることからもうかがえる³。

木村は「大愚 須田剋太」という同題の文章を都合3回発表している。全て丸栄スカイル8階美術画廊での「須田剋太展」図録に掲載したもので、文末の日付はそれぞれ、「一九八一・九・一」、「一九八三・八・一〇」、「一九八四・一・五」となっている⁴。この内、「木村定三著作集」では最後の1984年版を収録したのだが、それ以前の版と見比べることで推敲の跡が浮かび上がってくる。基本的には同じ文章でありながら、より良いものを提出しようという木村の、須田と鑑賞者の両方に対する細やかな気遣いが感じられるのである。

言い回しの修正を以下、具体的に見ていこう。

1981年版

私は我国の現在の洋画界は大関、横綱の空位時代であり、この空位をふさぐべき最短距離にあるのが須田剋太であると思う⁵。

1983年版

熊谷守一、香月泰男、亡き我國現在の洋画界は、大関、横綱の空位時代であり、この空位をふさぐべき最短距離にあるのが須田剋太であると思はう⁶。

1981年版でほかされていた画家の名前が、83年版では熊谷、香月と明確にされている。おそらく、「横綱、大関とは誰のことか」という質問を度々受けたのではあるまいか。実際、この時期まだ梅原龍三郎や小磯良平といった戦前から活躍する大家たちも健在であり、熊谷と香月の二人をもって横綱と大関とするのは、やはり木村独自の見解と言わざるを得ない。そのため、二回目の掲載では具体名を挙げることによって、より木村自身のスタンスが明らかになっており、マイナーチェンジとはいえこの修正が大きな意味を持っているのは確かである。

1981年版

司馬遼太郎さん等の解説によれば、彼は現在七十五才であるが、郷土の中学を出て東京美術学校を四度受けて四度落ちた。その後ほゞ独学で勉強して、三十三才第三回文展に「読書する男」で特選。三十六才第五回文展に「神将」で特選。四十一才第三回日展に「ピンクのターバン」で計三回特選を得た。彼の四十才の頃近來の名僧として有名であり東大寺の管長を務められた、今は故人の上司海雲さんに「善財童子」と評された。

3 木村定三「大賢大愚一人横綱 須田剋太」『須田剋太展』名古屋丸栄スカイル8階美術画廊、1988年、ノンブルなし。

4 個展の会期はそれぞれ1981年10月3日～8日、1983年10月4日～10日、1984年1月26日～31日。

5 木村定三「大愚 須田剋太」『須田剋太展』丸栄スカイル8階美術画廊、1981年、ノンブルなし。

6 木村定三「大愚 須田剋太」『須田剋太油絵展』丸栄スカイル8階美術画廊、1983年、ノンブルなし。

1983年版

司馬遼太郎さん等の解説によれば、彼は昭和五十八年の現在七十七才であるが、昭和二年郷土の埼玉県立熊谷中学を出て東京美術学校を四度受けて四度落ちた。その後浦和で廃屋を借りて独学で勉強していたが、たまたま浦和にやって来て彼の絵を見た画家の寺内万次郎が、剋太の絵と才能を認めて光風会に入れて日展に出品させた。そして三十三才第三回文展に「讀書する男」で特選。三十六才第五回文展に「神将」で特選。四十一才第三回日展に「ピンクのターバン」で計三回特選を得た。寺内は彼の最初の恩人と云うべきである。

彼の四十才の頃近來の名僧として有名であり東大寺の管長を務められた、今は故人の上司海雲さんに「善財童子」と評された。

須田の初期の経歴に関する言及であるが、初出での記述にさらに具体的な内容を加えているのが分かるだろう。二年後に発表する際に、須田の年齢も執筆時点のものに改めているのはある意味当然だとしても、「郷土の中学」に埼玉県立熊谷中学と追記し、寺内万次郎について補足することで、寺内との出会いが画業における転機となったことがよく分かる文章になっている。

1983年版

もしも彼が無味乾燥な非具象画のみを描いていたならば、正に「ゴビの砂漠に埋没して白骨と化する運命にあったと思はれるが、それを救った命の恩人とも云うべき人は、橋本申一さんである。氏の推選で彼は昭和四十六年一月から始まり現在も續いている週刊朝日司馬遼太郎の紀行文、「街道をゆく」の挿画を担当することが出来た。日本国内はもとより世界の隅々まで、司馬さんに同行して、或は未見の大自然に接して大感激し、或は各地を見聞して風俗や人心の機微に触れて、自己の世界を擴大できたことは正に彼にとって天恵であった。そして具象で、おそらくは五千枚を越す各地の風景画、風俗画をガッシュ（不透明水彩画）で制作したが、彼のガッシュの絵は彼独特の技法によるもので、油絵に劣らない程の強さ、きびしさのある優れた作品と思う。

この部分は1983年版で新たに追加された段落である。「街道をゆく」は1971年から連載が始まっているので、それについて触れようと思えば1981年版でも触れられたはずである。ならば前回の文章を発表して以降の2年間で、「街道をゆく」の挿絵について、木村の中での評価が定まったのであろうか。それもあったかもしれないが、これについては前段の、抽象画（木村の用語では非具象画）についての文章に続いて、この部分が挿入されたという点が重要である。つまり、抽象画の価値は認めないという木村の立場から、須田も抽象画を描くべきではなかったという主張につなげる形で、近年の須田の具象画の成果として「街道をゆく」を挙げているのである。これにより、具象画に対する木村の持論にさらに説得力が加わっている。

なお、1983年版を81年版と比較すると追記された部分も多く、かなり手が入っているが、83年版と84年版ではあまり異同がなく、基本的には83年版に最低限の手を入れたのが84年版と考えてよいだろう。

その後、木村は同じく丸栄での須田展に際して、「大賢大愚一人横綱 須田剋太」(1988年)と「突然変異の天才作家 須田剋太の『芸術的価値』と『究極の価格』」(2000年)という二つの文章を発表している。これらは「大愚 須田剋太」で書いた内容をベースにしつつも、それぞれに大幅に手を入れて別の文章に仕上げられ、また二つの文章の間には12年の歳月が流れており、この間の木村の評価の変化をもうかがい知ることができる。

1988年の須田論で注目すべきは、前後に改行を挟んで一つの段落を独立させ、その最初の文章に比喩的な断定文を持ってくる形式が採用されていることだろう。例えば下記のようなものである。

彼は世界一の活火山である。

今年の一月には大阪の阪急百貨店で、四月には四国の松山の三越百貨店で、また、今回は名古屋丸栄百貨店で、一年間に三回も個展を開催し、毎回百数十点の作品を出品しているが、そのエネルギーはまさに世界一の火山の爆発力の様である⁷。

実はこれは木村の得意とする文体で、同じ形式をかつて熊谷守一を論じた際にも採用している。

熊谷さんは噴火山のようだ。

次々と過去の作品を上回る作品を発表して、自己の領域を高め広める様は、あたかも噴火して絶えず山容を改めつつある活火山を連想する⁸。

噴火山が活火山に代わっているが、最初の一文で結論を先回りしておいて、続く文章で補足説明するという同じスタイルを採用していることが分かるだろう。この1988年版で木村は「私は曾て我国の洋画界の現状は、横綱、大関の空位時代で、それを襲う最短距離にあるのが須田剋太であると評したが、その後、彼は弛み無き努力精進を重ねて大躍進を遂げ、今や私の番付では、彼のみが堂々たる一人横綱で、大関は未だ空位である」と述べる。横綱大関を目指せと言っていた須田が、9年の時を経てついに横綱に昇格した際に、かつて横綱だった熊谷を論じる際に用いた形式を満を持して採用しているのである。

また、このなかで須田とワイエスを世界の二大画家としている点も、かつて「現存世界の二大画家は、ピカソと熊谷である」⁹と論じた以前の文章を踏襲している。須田が熊谷

7 前掲「大賢大愚一人横綱 須田剋太」。

8 木村定三「熊谷さんの人間像」『熊谷守一作品撰集』株式会社大阪フォルム画廊、1969年、12頁。

9 木村定三「ピカソと熊谷」『芸術新潮』1958年12月号、新潮社、160～161頁。

の後継者であることは木村によって度々言明されてきたが、同じく木村はピカソに取って代わる画家がワイエスであると考えていたことも間接的に表明されている点で、この部分は重要である¹⁰。

また、須田のコラージュの発明を、ピカソのキュビズムの発明に比較しているのも興味深い。20世紀の美術史において、しばしばコラージュはキュビズムの技法とされるが、木村がここで念頭に置いているのは、小さく切り刻んだ色紙を散りばめた装飾的なコラージュのことである。これによって生まれた画面の効果を木村は高く評価し、自身が当時所有していた《東大寺大仏殿落慶供養図》(コレクション番号KT008)を須田の最高傑作と言って憚らない。

2000年版の須田論は木村自身が亡くなる3年前の86歳時に記したもので、公的に発表された文章としては最後のものとなった。それゆえか、須田について書かれたものでありながら、「厳肅感と法悦感」などの木村の初期の文章から何度も書かれてきた内容が改めて論じられており、その意味においても感動的な内容である。小川芋銭、熊谷守一、香月泰男と木村にとっての歴代横綱が列挙されたあとに須田もここに名を連ねており、まさに最晩年に書かれた木村のコレクター史を概観するような流れになっている。

注目すべきはピカソへの評価である。かつて「現存世界の二大画家」だったピカソであるが、香月のシベリアシリーズはゲルニカよりも上とされ、さらには須田はピカソより上であることが世界の常識となる日が来ることを予言して終わっている。単なるレトリックであると言ってしまうとそれまでだが、木村の評価の変遷を見てとれる箇所である。

2000年版がそれ以前の須田展と異なるのは、須田没後の文章であるということだ(須田は1990年に84歳で他界)。「現存世界の二大画家」などと繰り返していた木村が、現存であることにこだわっていたのは、直接画家本人と触れ合い次の新作を心待ちにする楽しみがあったからである。熊谷、香月に続き須田までも失った木村の寂しさは如何ばかりかと思わずにいられない。

最後のものとなったこの文章で木村は次のように述べている。「わが国美術界の多年の弊害は、外国の作家に対して劣等感意識が強く、その内容的価値において、日本の作家の方が優れている場合でも、その芸術的価値を過小に評価し、外国の作家の作品は、莫大な価格で各地の美術館が購入して憚らないのは、実に嘆かわしき次第である」¹¹。美術館で働く一員として、木村の直言は実に耳が痛い。と同時にこうした台詞は、木村が作家と緊張関係をもって接した上で、その活動を心から支えていたからこそ発せられたものだとも感じられる。同じ画家について筆をとるたびに、木村は自分の審美眼に照らし合わせつつ改めて画家の仕事に対する理解を深めていったことだろう。木村が残した一連の須田論は、そのように長い時間をかけて作家と付き合い、作品に向き合ってきたコレクターだか

10 現在の木村コレクションには絵皿やポスターを含む6件のピカソ作品が含まれている。同様にワイエスの作品もオフセットなど4件の作品が含まれている。

11 木村定三「突然変異の天才作家 須田剋太の『芸術的価値』と『究極の価格』」『須田剋太展』丸栄美術部、2000年、ノンブルなし。

からこそ書ける内容なのである。

筆者にとって、木村が生前に残した文章をまとめてその推敲の跡を辿ることは、木村定三の目を通して、作家と作品に改めて向き合うような機会であった。「著作集」と「補遺」に収録した木村の著作が今後広く読まれ、この稀有なコレクターの芸術観を理解する一助となることを願ってやまない。

愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for the Aichi Prefectural Museum of Art, featuring the lowercase letters 'aomaa' in a stylized font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, sans-serif font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.